

提出日： 2025 年 7 月 1 日

研究促進期間制度 研究実績報告書

所属学部・研究科	身分	氏名
経済学部	准教授	本田貴久

研究期間	以下1～4より、取得した研究機関を選択し、該当番号を右欄にご記入ください。
	1. 2024年4月 1日 ～ 2025年3月31日
	2. 2024年9月 1日 ～ 2025年8月31日
	3. 2024年4月 1日 ～ 2024年9月20日
	4. 2024年9月21日 ～ 2025年3月31日
活動報告	研究期間中に実施した研究活動を具体的にご記入ください。 海外活動補助費を受給した方は、海外活動の内容が分かるようにご記入ください。
	2024 年度の研究促進期間において、フランスのエクスマルセイユ大学（CIELAM）に客員研究員として滞在し、20 世紀フランス文学、特に両大戦間期の前衛文学を対象に研究を行った。中心的研究対象はミシェル・レリスであり、彼の長大かつ難解な文体を精査し、「躊躇」の文体として作品分析を行った。また、フランス現地の文学研究の動向や、近年注目される社会的テーマ（ジェンダー、階級、環境問題など）の文学研究への影響を観察する。このほか、パリとは離れた南仏という地理的な特性を活かし、南仏文化に関するフィールド調査も行い、レリスの盟友アンドレ・マッソンやその隣人で画家・版画家であるレオ・マルシュッツに関する資料収集・整理を進めた。
得られた研究成果について	上記の研究活動の結果、得られた研究成果についてご記入ください。
	①ミシェル・レリスの文体研究：長文傾向の要因を「描写の精密さ」ではなく「躊躇」による記憶の複数化と捉え、その戦略的意図を明らかにし、2025 年度『仏語仏文学研究』第 57 号に発表した。 ②現代文学のリアリズム傾向に関する調査：アニー・エルノーやエドゥアール・ルイなど、自己の経験を主観的に記述するリアリズム文学の隆盛をフランス現地で調査し、アントワヌ・コンパニョンの著作『文学は割に合う！』の翻訳作業に着手した。 ③文学の終焉をめぐる言説の検討：文学研究・人文知の意義について、教育制度の変化を含めて現地研究者の見解と照らしながら検討を進めた。
今後の計画について	得られた成果を踏まえ、今後どのように研究を発展させる計画か、ご記入ください。
	①レリス研究をさらに深化させ、今後は彼の「自伝」と「人類学的視点」が交差する箇所に注目し、「躊躇の文体」がどのように彼自身の「弱さ」の思想（もちろんそれは体系として構築されるものではないが）と結びつくかを包括的に論じる。 ②翻訳作業中のアントワヌ・コンパニョン『La Littérature, ça paye!』の完訳を目指し、フランス文学の現代的価値の再評価と日本への紹介を進める。また従来の人文知を中心とする「教養」について、その意義を最大限に評価しつつ、時代の変化に応じた再定義を試みる。 ③レリスとアンドレ・マッソンとの書簡を軸とした書誌調査を発展させ、20 世紀前衛文学と美術の交差点を照らす学際的研究を展開予定。